

れにもかかわらず、F・W・Notestein（プリンストン大学の人口研究所長）が「日本の運命にとって最も重大性をもっている日本の人口現象に関して、その基礎研究の源泉たる人口学講座が、日本の大学において正式に一つもない事態は不思議である。」と批判したことは、特に留意する必要がある。わが国の運命に緊切に関連している人口現象・人口問題・人口対策の学問的研究は、昔から非常に弱く、現在においてさえ、往々、単なる常識的な見解の下で、これらの問題を皮相的・近視眼的に処理せざるを得ない状態であり、そのため、わが独立日本の国民生活の前途に立ちほだかつて増大しつつある人口現象の脅威に対して、これの正しい解決や行政に資する、最も必要な研究を期待することができない不幸な実情にある。この原因は、結局、大学において早くから人口学講座が設けられていなかったことに源流しているとみてもよい。もちろん、わが国の大学に、近時、僅かではあるが、人口に関する短期的講義は行われてきたが、国立の大学には正式な講座としての人口学講座は一つもない実情にある。

ここにおいて、本会議は、大学院をもつ総合大学の学部で人口学講座を早急に設置することを最も必要と考え、専任の教授、助教授、助手の研究陣と、研究設備の充実した研究体制をもつ実験講座組織の下で、人口の基礎的・理論的・具体的諸研究が推進されるよう要望してやまない。そして、人口学講座における研究内容については、人口学一般の体系的研究のほか、最近とくに具体的諸重要課題の研究が、わが国民生活の安定と向上のために強く要望され、そのなかには他の科学と関連し、その協力、援助を要するものが多くなっていることにかんがみ、人口学講座は、例えば社会学科、経済学科、農業経済学科、公衆衛生学科等のなかで設置されて、それぞれ特色のあるものとなることが望ましい（参考資料、Ⅳ参照）。

かくして、人口学講座における研究実績は、直接には、遅れているわが国の人口学の将来の発展のために、わが国の人口現象・人口問題・人口対策の諸研究の正しい発展を育成し促進する上に必須な貢献をなし、進んでは、本講座の研究業績の発表は、国際人口学界、わが国に要望している日本の人口諸研究にこたえて、世界の人口学界に対し、大なる国際的協力と貢献をなすものである。また本講座担当教授は、あるいは人口問題研究審議会の委員を兼務し、直接にわが国の人口問題の研究を指導する。なお、また本講座では、専攻学生を教育するから、卒業後、彼等はあるいは大学院に入り人口学の研究に新分野を開くもの、あるいはその専攻の学問をもつて人口問題総合研究機構または連関の研究機関に入つて研究に従事するもの、あるいはまた、関係官庁に入つてその専攻の立場から人口問題解決の直接、間接の企画立案に奉仕するもの等、いずれも日本の将来にとって緊急に要する専門的人材の給源として人口学講座の創設の意義は大きい（下線を付した研究機関については参考資料、Ⅲ参照）。

3-39

庶発第24号 昭和32年1月12日

内閣総理大臣 石橋 湛山 殿

日本学術会議会長 茅 誠 司

蛋白質食糧問題を総合的に考える機関の設置について（要望）

標記のことについて、本会議第22回総会の議により、ここに下記のとおり要望します。

## 記

わが国の経済自立の観点から、食糧問題を解決し、国民栄養の完全を期するためには、当面、蛋白質食糧の生産増加、加工、貯蔵および利用の合理化を図ることが特に重要である。政府はこの問題解決のため、根本的対策を樹立すべきであり、そのいとぐちとして、従来の関係各研究機関の機能を一層有効に活用し、さらにそのわくにとらわれず、本問題を総合的に考える機関を早急に設置することが必要である。

### 理 由

わが国の経済自立体制を確立するための長期的な観点から、日本学術会議は、食糧問題を総合的に検討した結果、解決の中心課題は蛋白質食糧の生産、加工、貯蔵および利用の合理化という問題にあるという結論に到達した。

従来、関係諸研究機関ならびに大学等における食糧生産に関する試験研究は、技術の改善や品種改良等の業績によつて、食糧生産に貢献しているところ多大なものがある。

しかるに、もし国民の食習慣が従来のものであるならば、米の需要ばかりがますます増大し、しかも国民の栄養は低下するだけであらう。いま仮りに、1953年(昭28)の国民食糧構成のままで進むものとするならば、わが国の人口が1億に達した場合の米の需要量は、一人一日当り376gとして9.160万石を必要とする。ところが国民栄養の改善と米の節約とを兼ねて、米の消費量を一人一日360gを目標とするならば、人口1億に対する需要量は8.760万石で足りるのである。このようにして米からのカロリー供給不足分を小麦で補うことを考え、蛋白質食糧として畜産物その他を組み合わせるならば、食糧消費を一層合理化することができる。わが国の食糧問題をこのように考えるとき、国民栄養の改善と米の節約という面から、蛋白質食糧に特に重点をおく必要がある。

また、蛋白質は人体が必要とする熱量に対して適当な量が供給されることが必要であるから、これを供給する食糧は絶対的に必要である。ゆえに、狭小な国土を利用して、量よりも質において効率の高い食糧を生産し、現在の炭水化合物偏重の食糧構成を合理化するためには、蛋白質食糧に特に重点をおかれる必要があると考える。

現在、蛋白質食糧は、農畜水産の生産的合成による段階にあり、貯蔵、輸送および利用の改善についての問題が多く残されている。一方、酵母、かび、クロレラ等による蛋白質の工業的生産も、すでに可能な段階になつている。これらが直接には、食糧に不向きとしても、家畜の飼料として利用することにより、乳肉卵の増産を期待することができる。

蛋白質の栄養価値は、その構成アミノ酸によつて決まるものであるから、もしある種のアミノ酸が欠けるか、または不足のために栄養価値に欠陥があるものについては、化学的合成アミノ酸を補充することによつて、栄養価値の完全なものを得られるであらう。すなわち、アミノ酸合成工業もまた蛋白質食糧の生産と直結するものである。

このように、蛋白質食糧は、科学および技術の応用によつて他の食糧生産よりも、増産の可能性が大きいと考えられる。

よつて、政府はこれらの問題について、特に基礎的、総合的に調査研究するための機関を設置し、蛋白質食糧の生産、加工、貯蔵および利用対策を樹立することが緊急である。